

痛恨な私の青春時代

平成27年9月

戦後70年ということです。二度とあんな思いはしたくない！戦争中は郷里彦根も連日、B29による空襲が頻繁にあり、サイレンが鳴るたび、庭の粗末な防空壕に逃げ込んだ。昼となく夜となく、今日は死ぬかと恐怖に苛まれた。

今も手元にある平成27年3月6日付の産経新聞に特集として、本土空襲による県別死者数が公表され、1番は広島（約14万人）2番は東京（約10万7千人）3番が長崎（約7万2千人）と続き、滋賀県は下から5番目の僅か34人となっている。これは全くの出鱈目で、私は即刻いき証人として、新聞社に抗議したが、今もって返事がない。

私達、彦根城東小学校6年生から高等科までの3年間は、彦根駅裏側の外町にあった近江航空という会社で、学徒動員として働いていた。われわれ子供が、零戦という戦闘機を造っていたのである。工員はほとんど若い女工さんばかり、男もいたが病弱者ばかり、私共の仕事は、飛行機の鉄骨にジュラルミンという鉄板を鋸で打ち止める作業、二度と還らぬ特攻機はベニヤ板一枚で、それはもう実に粗末なものでした。昼間空襲のつど、生徒は先生に引率され、500軒先の里根町の裏山に避難した。いつも駆け足である。工員たちも逃げる事が出来た筈なのに、命令なのか空襲慣れのせいなのか、一人として工場から出た人はいない。それがある日突然、一発の大型爆弾により、一瞬にして緑色の閃光と地響き、工場は石塀の囲いもろとも大地に巨大な穴が開き無惨にも何一つ残さず吹っ飛んだ。私達生徒はこの悪夢の光景を目の当たりにアッと叫びながら、この惨状をつぶさに見おろしていた。死んだ工員は百人以上いた筈であり、あの時、隣町米原の人達が電線に肉片や布切れが、至る処に引っかかっていた、と私も直接聞いた。

軍需工場はもう一カ所松原にもあった。ここは焼夷弾で焼かれたが、詳しいこと分からない。同系の会社で元は近江絹糸といていた。私は彦根に帰るたび、外町の工場跡地を訪ね、長い間、石材商の石置場になっていたが、網越しに手を合わせ般若心経を唱えさせていただいた。10年ほど前から住宅が建ち並ぶようになった。そろそろあの巨大な墓場も風化されていくのだろうか。あの時、犠牲になった人も、またその家族の方々も今はほとんどおられないだろう。今なら私の同窓生もいることだが、行政は犠牲者のことは一切公表されていないから、無念な思いで胸が一杯になります。戦争中は余計なことは絶対、喋るなど親からもコンコンと言われたものであります。

この平和な世界、少しでも長命でありたいと願っています。

清水義雄（彦根市出身）